

## 手塚治虫作品集その15——『メトロポリス』——

SF三部作『ロストワールド』（一九四八年）、『メトロポリス』（一九四九年）、『ネキストワールド』（一九五一年）は、戦後間もない頃の作品群である。戦後生まれの私たちにとつて、この作品群は先端科学技術の推移を彷彿とさせる事象を満載する。そして、人類のあるべき姿を浮き彫りにしていく。言い換えるのであれば、人類の未来とは、人や生物の命とはと深く掘り下げて見つめて行く視野を養うに打って付けのマンガ作品であった。この『メトロポリス（大都会）』は〈前世紀〉前後編二冊、〈来るべき世界〉前後編二冊の中間に位置する一冊完結の作品となつていのである。

この作品はベル博士の話に基づく地球生物の変遷史でプロローグを構成する。中生代に栄えた恐龍：、大氷河期に悉く絶滅（巨大化したからだが造山活動や環境の変化に絶えられない）、この氷河時代の末にサーベルトラ、マンモス象（発達しすぎた牙のため滅ぶ）の出現、人間という動物による地上征服（ただ一つの武器「頭脳のちから」であらゆる地球上の生物を駆逐し続け、人間の高度な科学の文化は絶頂に達する）と……云うのだ。

だが、この科学文明に手塚治虫はどう向き合うのかと云えば、大都会のシンボルとも云える超高層ビルの建造物とサーチライトで夜空を照らしだす光景が描かれ、これをバッグにして花丸博士が、こう予言する。

しかし、いつかは人間もその発達しすぎた科学のためにかえって、自分を滅ぼしてしまうのでは

ないだろうか？（11頁1コマめ）

とメッセージを伝える。このメッセージが終わりに再度用いられ、

おそらく、いつかは人間も発達しすぎた科学のためにかえって、自分を滅ぼしてしまうのではないだろうか？（160頁2コマめ）

と出だしの接続詞を置換えて同じ内容のメッセージをもって促している。この前後の花丸博士の服装に注目してもらいたい。彼はズボンの色を濃いめから薄めへとはきかえがなされていることに気付く。



19××年夏……



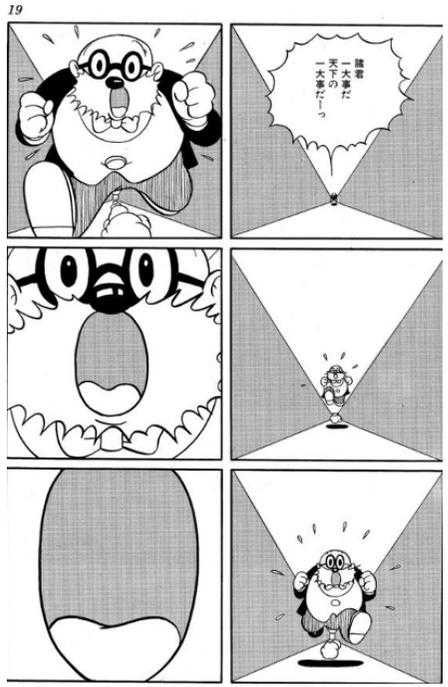
〔メトロポリス〕 完

次にこの「メトロポリス（大都会）」を象徴とする人間社会を、パノラマ化に描いてこれを人々の会話する様相をここにしつらえて表現する。



いるのはチャールズ・ロートン博士の発表する人造細胞のデータらしいってさ」

B：会議に招集した世界中の科学博士たちの会話「なんとなくねむくなってござる」「諸君、ワガハイの説に賛成してくれたまえ」「この中にや、たいいていニセが何人かおるよ」「だれかわしにお菓子をくれんかな。そしたらわしは効果的撰取法について、実際にやってみせるがのう」「うるさいっ。貴公のつばのおかげで部屋の湿度が上がるわい」「なアるほど三歳の博士つてのはきみかね」「たす一は二じゃわかったか。アーン」「わがはいは、いかなることも知っておるぞ。このヒゲが目にはいらんか」「じゃあ、おさるのしりはなぜ赤いんだ」「ナンジャ。モンジャ。モガモガ。ゴニョゴニョー」「きよう集まった中には、宇宙の真理を知っとる者は、ひとりもおらん！ああ、なげかわしい」「みんな、どんどんいろんなもの発明するからもう。わがはいの発明するものがない……オホン」「わしやあ、やせる薬を発明した者じゃよ」「BONJOUR M VAUBAN ENCHANTE DE VOUS VOIR」「HELLO M: DONALD I'M GLAD TO SEE YOU」「GUTEN MORGEN」「-o e b



# \$ ☆ !! ? ? + Q - 「オンヤ、ピッコロ博士がすっとなできたわい。」「どうしたあわを食って」「アワなんか食つとらん！こう見えてもパンを食つとる！」「ええ？」「宇宙は三角形じゃちゆうの……」「いや、四角だよ」

※ピッコロ博士がすっとなで来る図絵が前頁に描写されていて、これと同じ描写方法は、『弁慶』のなかで行われている。

C：議長「ああ、ついに、きたるべきときはきた。つい数週間前から太陽の表面に異常を認めてきたのである。そして、すこしずつ太陽の輻射熱が高まり、放射線も増加していたことが、われわれの不安をつのらせておった。いまこそ、われわれは、凸凹頭をならべて、この大異変の次に起こる大惨事の対策を、考えなければならんである！」副議長「みなさんお静かに願います」会場の博士達「ええ、わしの意見としては」「だれがなんといおうと、わしは、わしの意見をかえんぞ。わしや、死ぬのはいやじゃい！」「わしも同じ意見じゃ」「すわれっ」「前がじやまだ」「おお何とおそるべき大事件じゃ。わがはい、さっそく、帰って、逃げるしたくをいたす」「わしの研究によると、黒点騒ぎで、すくなくとも詐欺師が十倍ぐらいにふえますぞ」「ハハーン。何をいつてるのか、さっぱり、わからん！」「わからんとは運のいいやつだ！」「そのひげもじゃ、うるさいぞ。わがはいがしゃべろうとしているのに……」「ワア」「プーピー。チャーピー。パーピーポー。パーピーポー」「いたいっ」

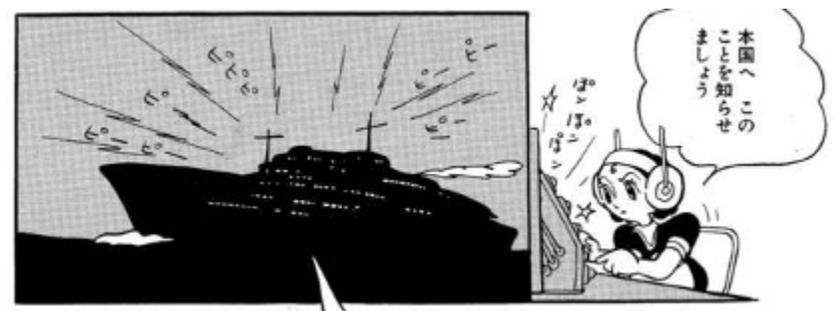
〈課題〉このA・B・Cのパノラマ描写の光景とここで交わされている会話表現について詳細に解析してみよう！。「解析」とは、ことばの表現力を知ることである。一語を引き出してその解析方法をここで説明しておくので参照されたい。

【用語解析例】「Cの議長会話語」「凸凹頭」……この漢字「凸凹」は、通常「でこぼこ」と和語訓読する。

中国漢籍資料では、「オウトツ【凹凸】とていう。これが日本に語輸入されたとき、文字転倒して「でこぼこ【凸凹】と表現する」「左右」が「右左」、「黒白」が「白黒」など。この文字の読み方は、今は「でこぼこ」だが江戸時代は、「でくぼく」と読み表記していた。「でくは」「でつぱり」を意味し、「ぼくだが、これはくぼ」の転倒とば、「てくぼ」「えくぼ」といった「くぼみ」「をいう」とば「くぼ」が「ぼく」と上位「でく」に呼応するように変化したのである。「でくくぼ(み)」が「でくぼく」に変化した。「このことばが口語表現であるからにして」「でこぼこ」となるのもありえた。一度「でこぼこ」となる」と、もう元に戻る」とはない。京都の方言語に「でこぼこ【出ッ齒】意味は八重歯をいう」を「でこぼこ」をいう。



「ソウデスヨ。コノ  
チカホンブニハ、ダ  
イコウジョウガアッ  
テ、ワタシノナカマ  
ガ、コワレルマデ、  
ハタラカサレテ、イ  
ルノデス。レッドコ  
ウハ、オソロシイ、  
カガクシヤデスヨ。  
ワタシタチハ、セツ  
カクウマレテキテモ  
……、タダニンゲン  
ニ、コキツカワレル  
ダケデ、ナンノタノ  
シミモ、アリマセン。  
ワタシハ、レッドコ  
ウヲ、ウラミマス……」



「ロボット会話文」 「なるほどねえ。気の毒じや。よろしい、わしが、なんとかして、きみたちの力になってやろう」 「ヒゲオヤジ会話文」

ミツチイは、人間にも、動物にも、植物にも、鉱物にも、人遺細胞にて、つくられし人造人間にすぎず、そのからだにしかけたる多くの秘密装置により、ミツチイは、十萬馬力の超人力をはつきし、世界無敵たるべし。ミツチイの肺は、ヘリウムガス分析作用あり、深呼吸をなせば、空へ浮かび上がるべし、その耳は魚のエアのごとく、水中にても自由に息を続けられるべし、ミツチイののどには、ボタンひとつあり、押せばミツチイは男にも、女にも姿が変わるべし……



人造人間「ミツチイ」

ミツチイは、人間にも、動物にも、植物にも、鉱物にも、人造細胞にて、つくられし人造人間にすぎず、そのからだにしかけたる、多くの秘密装置により、ミツチイは、十萬馬力の超人力をはつきし、世界無敵たるべし。ミツチイの肺は、ヘリウムガス分析作用あり。深呼吸をなせば、空へ浮かび上がるべし。その耳は魚のエアのごとく、水中にても自由に、息を続けられるべし。ミツチイののどには、ボタンひとつあり。押せばミツチイは男にも、女にも姿が変わるべし……



この本を書いたのは誰か？そして、今此の本を手にする少年は如何なる人物か？考察して戴きたい。下図には、終末に二人が時計台の上で闘うシーンが描き出され、少年は柔道の奥の手であるという”山嵐”の技でミッチーをなげつける。やがて、ミッチーのからだだからけむりがたちだし、溶けだし遙か下の地上に落ちてゆく姿が描き出されている。



野球のユニホームで身をかためたミッチーがはじめてメトロポリスの上空を飛行自在に飛び交う容子が描かれる。この空飛ぶ人間の姿を目にした人々の羨望の容子を手塚は見上げる人々の複数の顔顔で細かに描き出している。これを目撃したメトロポリタン、デーリー新聞社では、「さうだ。あの怪人だ。ウンすぐヘリコプターで追跡してくれ」さらに、メトロポリタン警察の総監室にもこの情報がもたらされる。

だが、これ以上に奇妙なダルマ博物館に出現した怪物、ネズミの人間大が取り沙汰されている。これを検識したヨークシャ・ベル博士は、この怪物をこう説明する。「これは、学名をミキマウス・ウォルトデイズーニという動物ですぞ」「わかりやすくいえばネズミです」そこで解析説明として、左図に示した幾つかの事例が紹介される。1, 大きな蜂の大量に襲われるアメリカ西部の人たち。2, インドの直径五メートルもある蟻地獄の穴が開いて人や馬が落ち込む。3, コロラドでは人食いバツタが出てきてインディアンが全滅。4, 日本では、家の屋根の上に、カボチャをつくつてお



いたら家がつぶれてしまったのでいまではカボチャをくりぬいて家に行っている。5, 中国では、二十キロもあるミミズがさかんに、はたけをほじくりかえすので魚をえきにして、ミミズを釣ることがはやつている。とし、「世界じゅうの繁殖力の強い下等動物がこのとおりどんどん大きくなってきたんじや」「それというのも、みんな、あの憎らしい太陽の黒点から出る放射線のいたずらなんです。このままだと世の中はめちやくちやになつちまう…」

ホームズさん登場：「ハッハッ。その黒点がいんちきだつたらどうします」「あれは人口黒点ですよ。レッド公のしわざですよ」

「コラム」**極限状況の会話表現を見抜く**

「いったいなんの騒ぎが起こつたんだ！」「暴動らしい」「ボートじゃない。ボート屋が破産したんだ。」「だから宇宙人が円盤にのつてせめてきたんだ」「わしや、荷物をまとめていなかへひっこすよ」「ギュー苦しい。圧死だ。人殺し！」この場面にはことばのしりとりが見られ、デマ騒ぎの状況を旨く見逃さない緻密さがにじみ出ている。





あたしは どうしても  
おとうさんや おかあさんに  
あいたいで これから 旅に  
出ます きつとどこかで  
めぐりあえると信じてます  
今までのこと ありがとう  
ケン1さん さよなら……

とあって、横書きひらがな漢字交じり文で綴っている。ここでは、この書き文字をミッチイがどのように学習したのかは描かれていないが、漢字は、「旅」「出」「信」「今」の四語を用いる。自称代名詞は、「あたし」と女性語表現を用いる。

これを読むエンミイとケンイチは、驚きの表情を隠せない。ミッチイは曾て、リットル中学校で学ぶエンミイが学友からいじめを受けているのに対し、

「いくらスラム街の人間でもねえさんが悪人でもエンミイに罪があるもんか。どうだ」

と力尽くでねじ伏せる。これを見ていたケン一が「ウーン。

あれが人造人間だと信じられるか。りつぱな人間だ。いや人間以上の人間だ！」と感動してみせるのだ。最後に、この『メトロポリス』には、探偵がよく登場している。その一人で大きな担い手である「ヒゲオヤジ探偵」が名探偵シャーロック・ホームズ氏を暴くシーンとなっていく仕立てを行っている。このシャーロック・ホームズ氏は、レッド公の変装。そして警視庁は、半分以上がレッド公の腹心と化していたという筋書きである。この正体を現したレッド公は、彼を「ヒゲオヤジ君」と新愛語表現の「君」を付けて呼ぶ。彼が緊急事態に際し指揮権を以て発動するのも見ものである。

メトロポリス港から二十万トンの世界航路船Ⅱ豪華船アトランチス号が船出する。このデブチン船長までがレッド公の変装の人物であったのだ。総監閣下とガニマル警部は人質として船に乗せている。この船にミッチイは女給仕として乗り込み、無電室の乗組員を睡眠薬を使って眠らせ、その無電で居場所を伝えるのが、カタカナ表記の事例二である。「アタシハ ミッチイデス アトランチス号ハ ビイビービイ レッドトウノ フネデス フネハ コウロカラハナレテ ○○フキンヲ ○○ノットデ ススンデイマス…」と送信する。ここで、「号」の漢字がふさしくないことを知るのであれば解釈学の力を備えたと言えよう。如何？

話を戻そう！。ミッチイは見つけ出されレッド公と対面する。ここで自身が人間でなく人造人間であることを知るのだ。ここより、人造人間ミッチイの人間に対する復習劇へと転じていくのだ。ミッチイはこう叫ぶ。「人間どもひとりだつて生かしておくもんか」「みんな見たか。ぼくたちをもてあそんだ人間どもの末路はあのとおりだぞ。「これからは、あべこべにぼくたちが人間どもをギュウといわせてやる番だ。みんなメトロポリスへ進撃！」「人間ども、いまにみろ。ひとり残らずもみくちやにしてやる」この最後のミッチイとロボットの反乱は、雪だるま式に加速化し、もう誰も止められないことを暗示している。手塚漫画は笑いやユーモアだけを読者に伝える作品ではない。明日の夢と希望を保つ爲に…。